様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６６１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６６００１９

研究課題名（和文）子どもの生体移植ドナーとなった親のレジリエンスを育む看護介入の検討

研究課題名（英文）Investigation of nursing interventions that facilitate parent donor's resilience

研究代表者
河上　智香（KAWAKAMI, Chika）

東邦大学・看護学部・准教授

研究者番号：３０３２４７８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：病児をもつ親のこころの適応を促進するために，生体腎移植を経験した親と小児がんの子どもの親を対象にインタビュー調査を行った．親のストレスからの心理的な回復には医療者からの援助が必要であることが確認された．レジリエンスの促進には心理的な衝撃を和らげる関わりが有効であり，親と医療者との信頼関係の構築が重要であった．退院後も子どもは治療を長期にわたって受けるため，看護師は子どもと親のニーズを予測しながら情報を提供することが重要である．

研究成果の概要（英文）：Child’s disease has an enormously stressful impact on families. Interventions that promote healthy and effective coping skills could help parents adapt to new lifestyles. The purpose of this study is to explore that influence resilience in parents experiencing the adversity resulting from their child’s illness such as living renal transplantation or cancer. Data were obtained semi-structured interviews and analyzed using a qualitative approach. The results suggests that the degree of recovery in their child’s diagnosis and their relationships with health care professionals are two of the most important factors in minimizing stress responses. Nurses have an important have an important role to play in the provision of comprehensive information, and they need to be vigilant regarding the individual needs both child and parents.

研究分野：医歯薬学

キーワード：生体移植　小児看護　レジリエンス　親

１．研究開始当初の背景

1963 年世界で初めての肝臓・肺移植が行われ,1964 年日本で初めての生体腎移植や肝臓移植,1975 年骨髄移植が行われた．日本の移植医療はほぼ世界と同時にスタートするも,脳死判定が審議され臨床への応用が進展しないという歴史をもっている．2010 年,改正臓器移植法が施行され,15 歳未満の子どもからの臓器提供が可能となった．しかし日本では,小児への臓器移植は 9 割以上が肉親をドナーとした生体移植という現状がある．生体移植は待機時間が長いため,術前に十分な準備ができ,長期生存が期待出来る利点があるが,家族内にドナーとレシピエントという手術患者を同時に抱えるという特殊性があり,家族関係に変調をきたすリスクが高まり,危機的状況に陥る．しかし生体移植を受ける子どもの親への支援に関する報告はほとんどなされておらず,移植医療において解決すべき看護上の問題となっている．

生体移植を受ける子どもの疾患は,発症時期には差があるものの,移植によって治療は終了せず,医療的なフォローを生涯受けるという共通点がある．そのため高ストレス下におかれた親は,病児のサポーターとして発症早期から心理的な適応を要求される．病児の子どもをもつ親のストレスに関する研究は多くみられるが,ストレスの現状や環境要因に関連する研究に限定され,ストレスを軽減させる支援に焦点をあてた研究が多く報告されており,ストレスから自ら回復する過程,能力に関する研究は少数であった．「レジリエンス」の概念には,逆境から立ち直りが含まれ,誰もが有し,発達させることができる特性がある．病児をもつストレスの軽減だけではなく,親のレジリエンスを促進させ,心自分自身の力による心理的な回復の支援を検討する必要があると考え本研究に着手した．

２．研究の目的

本研究の目的は,生体移植（腎・骨髄）を受ける可能性がある子どもをもつ親を対象に,子どもの治療に伴うストレスの緩和やストレスから立ち直り,気持ちを前向きにできる,レジリエンスの促進をはかる看護介入を考察することである．

具体的には,以下の内容を目的とする．

1）生体移植を経験した子どもの親を対象にインタビューを実施し,親のレジリエンスの要因を分析する．

2）生体移植をうける可能性がある疾患をもつ子どもの親を対象にインタビューを実施し,レジリエンスの要因を分析する．

3）インタビュー内容から,病児の親のレジリエンス促進支援を考察する．

３．研究の方法

1）生体移植を経験した子どもをもつ親へのインタビュー調査

（1）国内外の文献をレビューし,インタビューガイドを作成する．

（2）研究協力者の協力を得て,生体腎移植を受けた子どもの親に研究内容の主旨および倫理的配慮を説明し,インタビューを実施した．

（3）インタビューは半構成面接とし,得られたインタビューデータは,内容分析によってカテゴリーに分類した．

（4）研究グループで分析の妥当性および信頼性を確認し,研究成果の学会発表の準備を行った．

2）生体移植をうける可能性がある疾患をもつ子どもをもつ親へのインタビュー調査

（1）国内外の文献をレビューし,インタビューガイドを作成する．

（2）研究協力者の協力を得て,小児がんと診断された子どもの親に研究内容の主旨および倫理的配慮を説明し,インタビューを実施した．

（3）インタビューは半構成面接とし,得られたインタビューデータは,内容分析によってカテゴリーに分類した．

（4）研究グループで分析の妥当性および信頼性を確認し,研究成果の学会発表の準備を行った．

3）病児をもつ親のレジリエンス支援

（1）調査 1）および 2）から得られたデータを比較し,親のレジリエンス支援を考察する．

（2）親の心理的な適応を促す看護援助について考察する

４．研究成果

1）生体移植を経験した子どもをもつ親へのインタビュー調査

（1）研究参加者の属性

4 名の親が研究に参加し,全員が母親であった．生体腎移植を受けた時の子どもの年齢は 2～8 歳であり,3 名が移植前に透析療法を行っていた．

（2）研究参加者のレジリエンス

レジリエンスに関しては,国内外において研究知見が蓄積されている Grotberg(1995)のレジリエンスの枠構成要素（[I AM(inner strengths that develop over time and

sustain those who are dealing with adversities)],[I CAN(interpersonal and problem-solving skills that deal with actual adversity)],[I HAVE (external supports that promote resilience)])を用いて整理した.

表 resilienceの構成要素

I HAVE "external suports"	People around me I trust and who love me, no matter what. Peole who set limits for me so I know when to stop before there is People who show me how to do things right by the way they do Peole who want to learn to do things on my own. People who help me when I am sick, in danger or need to learn.
I AM "inner strength"	A person people can like and love. Glad to do nice things for others and show my concern. Respectful of myself and others. Willing to be responsible for what I do. Sure things will be all right.
I CAN "interparsonal and solving skills"	Talk to others about things that frighten me or bother me. Find ways to solve problems that I face. Contorol myself when I feel like doing something not right or Figure out when it is a good time to talk to someone or to take action. Find someone to help me when I need to.

生体腎移植を受けた子どもの親は,【治療法がある病気】【移植治療への期待】【日常生活の制限が緩和する】と子どもの病態に合わせて心理的状況が変化していた.

【治療法がある病気】は〈ハイリスク治療を受け入れる〉〈子どもは通常の生活に戻れる〉で構成されていた. 親は子どもの病名が告知され強い衝撃を受けるが,医療者からの治療方針の提案によって,治療法があることに安堵を覚え,子どもが治療を受けてほぼ元の生活に戻れることへの期待を高めていた. しかし子どもが透析を施行している場合,透析治療によって家族の日常生活が規制されること,透析治療は永続的ではないこと,子どもの活動性が制限されること,在宅医療的ケアが家族へ強いストレスをもたらすことから, 親にとって透析治療法は避けたい治療法となり,親は【移植治療への期待】を強めていた.

【移植治療への期待】は〈病気は決して良くはならない〉〈移植を治療のゴールにする〉〈ドナーは病人ではない〉で構成されていた. 医療者からの説明,同病の子どもをもつ親との交流から,子どもの病気が不可逆的であることを納得するようになった親は, 子どもの病状に合わせて医師からの「移植」の説明があると,移植を当面の治療の目標として設定していた. 子どもにとって最適な時期に移植を行うために, 親はドナーとレシピエントでとなる子どもの健康を慎重に管理していた. さらに厳しい適応基準を満たしドナー候補となった親は,身体的に健康であることを自認するようになる. 家族が遭遇した困難な出来事として, 移植を受ける子どもの生命危機の優先度を高くし,医療者も含めてドナーを病人としては捉えない傾向がみられた.

【手術後も新たな治療を続ける】は〈家族で制限緩和の生活を楽しむ〉〈再移植までの期間を延ばす〉で構成されていた. 生体腎移植後,移植された腎臓から尿が出るようになり,腎機能が安定していく. しかし子どもの食事や水分などの制限が緩和され,家族や子どもの QOL が拡大しても,親は再移植のリスクを少なくするために厳重な術後管理を継続していた.

一般的に腎疾患の子どもは小児科病棟で治療を受け,看護師は腎疾患を抱える子どもへの看護ケアを通じて,ドナーあるいはドナー候補となる者との関係を形成していく. そのため適応基準に合致したドナーは,身体的に健康な成人であるため,ケアの対象には含まれるが,小児科の看護師が積極的に介入すべき患者としては意識されにくいと考えられる. 移植を目標としてきた親は,術前は自分の健康に対する不安や心配を抱えておらず,移植を受ける子どもを最優先にして考えており,患者の立場としての入院病棟に勤務する医療者との信頼形成が後回しとなることが予測され,医療者からの意図的な働きかけの必要性が推察される. 看護師は親の術後の順調な経過を支え,親が親役割を果たせるように援助することが重要である.

2) 小児がんの子どもをもつ親へのインタビュー調査

(1) 研究参加者の属性

11 名の親が研究に参加し,9 名が母親,2 名が父親であった. 小児がんの告知を受けた時の子どもの年齢は 1～13 歳であり,インタビュー時は,平均 1.2 年が経過していた. 子どもの病名は 63.6%が白血病であった.

(2) 研究参加者のレジリエンス

Grotberg(1995)のレジリエンスの枠構成要素にそって分析した結果,表のように分類された.

表 小児がんの子どもをもつ親のレジリエンス

Factor	Subcategory	Category
I AM	Never crying in front of child	A person having a command of controlling myself
	Never thinking too seriously	
	Convinced recovery of child	
	Synchronizer with child	A person having a sense of responsibility for the child's health
	Collection of information by myself	
	Near child as possible as	
I CAN	Find someone who listen to me	Changing the mind
	Bounce back quickly	
	Communicate with nurseery, teacher	Accessing necessary service what I want
	Make the place that child return after discharge from hospital	
	Take the sleep enough	Managing to keep a good condition
	Be careful not to catch a cold	
	Eat with care to nutrition	
I HAVE	Medical staff advise parents how to calm	
	Partner who provides a sense of security	Emotional support
	Network with other parents of hospitalized children	
	Nurse who encourages emotional expression	
	Friends who listen to me suitably	Positive listener
	Friends who live in same region sympathizes with parents	
	Child fighting against cancer	
	Family who support each other	Encouragement
	Nurse who is attentive toward child	
	Doctors who make parents feel positive	

『I HAVE』因子には,【Emotional support】【Positive listener】【Encouragement】の3カテゴリーが含まれていた．親は自分の体験に耳を傾けてくれる人を希求しており,看護師と友人を情緒的なサポート源とみなしていた．直接的なケアだけでなく,看護師による闘病中の子どもを支える親への配慮が,親の気持ちを前向きにさせていた．親は家族,パートナー,病児のきょうだい,祖父母からの支援も認識していた．また医師の子どもの予後に関する説明に希望をもち,闘病の支えとしていた．

『I AM』因子には,【A person having a command of controlling myself】【A person having a sense of responsibility for the child's health】の2カテゴリーが含まれていた．親は治療を受けている子どもが医療者に自分の健康状態を正確に伝えられてないと思っており,子どもからの体調変化サインを捉える責任を感じていた．子どもの状態と親の心理的状況には相関関係があるため,親は子どもの前では自分の言動を制限する努力をしていた．

『I CAN』因子には,【Changing the mind】【Accessing necessary service what I want】【Managing to keep a good condition】の3カテゴリーが含まれていた．小児がんの治療期間は長期になるが,子どもの側で子どもの闘病意欲を支えるために,親は自分の体調を整える必要性を感じていた．また看護師からの親の関わりに対するポジティブなフィードバックが効果的であった．看護師と親に信頼関係が構築されると,親の不安感は緩和され,子どもの治療環境の安定へと繋がっていた．

病名告知時に,親はショックなどの強い衝撃を受けるが,医療者からの支援を認識することで,精神的な回復へと繋がることが推察される．そのため看護師には,家族を中心として問題を解決する姿勢が求められている．

3）病児をもつ親のレジリエンス促進支援

生体移植は長期生存が期待できるが,診断直後からハイリスクな治療を受け,術後は生涯にわたって医療的フォローを必要とする治療法である．生体移植を必要とする子どもの親は,看護の対象であるものと同時に病児の支援者となるため,看護師は複眼的な視点からの看護支援を意識的に実践することが重要であると考えられる．

1）2）の調査より,親のレジリエンスの促進には,医療者からの親の気持ちに添った分かりやすい説明,情緒的な支援が効果的であり,そのためには親と医療者間との信頼関係の構築が基盤となることが示されている．

治療早期の医療者から親への関わりが,親の心理状態を安定させ,親のレジリエンス促進に有意な影響を与えることが確認できた．今後は子どもの病気受容プロセスを整理し,親の心理的適応を促進させる看護モデルの構築が必要であると考えられる．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① Chika Kawakami, Chieko Fujiwara(2013) The Experiences of Parents' with Children Receiving Long-Term Home Parenteral Nutrition Pediatrics International Vol.55, No.6,査読有

② 渕田明子,河上智香,出野慶子（2012）子どもの看取り経験のつみ重ねによる看護師の思いの変化とその影響要因小児がん看護 7 巻,17-27．査読有

〔学会発表〕（計 10 件）

① Chika Kawakami,Keiko Ideno,Junko Ogawa, Rina Amano, Kana Harada,Noriko Morita, and Fukue Ishikawa(2014.10.23) Emotional experiences of parents caring for

their children with cancer the 46th Congress of the International Society of Paediatric Oncology Toronto Canada

② 出野慶子,河上智香,天野里奈,中村伸枝（2014.6.21）幼稚園・小学校に通う１型糖尿病をもつ子どもの母親の体験　第61回日本小児保健協会学術集会　福島グリーンパレス（福島県福島市）

③ Chika Kawakami,Keiko Ideno,Junko Ogawa, Kana Harada,Noriko Morita, and Fukue Ishikawa(2013.9.28) FACTORS RELATED TO PARENTS' RESILIENCE WHEN THEIR CHILD IS SUFFERING FROM CANCER the 45th Congress of the International Society of Paediatric Oncology Hong Kong

④ Junko Ogawa, Natsuko Ito, Chika Kawakami, Fumiko Inoue, and Eriko Suzuki(2013.9.27) The State of Dental Visit and Oral Health Care in Childhood Cancer Survivors　the 45th Congress of the International Society of Paediatric Oncology Hong Kong

⑤ 出野慶子,河上智香,天野里奈（2013.9.22）1型糖尿病をもつ年少児を育てる父親の役割　第 18 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）

⑥ 出野慶子,河上智香,天野里奈（2013.7.13）1型糖尿病をもつ年少児の父親の役割　日本小児看護学会第 23 回学術集会　高知市文化プラザかるぽーと（高知県高知市）

⑦ Chika Kawakami, Keiko Ideno, Asako Gima,Junko Ogawa,Yoshiko, Takeda, Noriko Morita, and Fukue Ishikawa(2013.2.22) Japanese Parents’Experiences as Living Kidney Donors for Their Children　The 16th The East Asian Forum of Nursing Scholars　Bangkok Thailand

⑧ 小川純子,伊藤奈津子,鈴木恵理子,河上智香（2012.12.2）小児がんの治療を受けた子ども・経験者の歯科受診と口腔ケアの実態　第 10 回日本小児がん看護学会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）

⑨ Chika Kawakami,Keiko Ideno,Yukie Tsuji, Kana Harada,Noriko Morita,Fukue Ishikawa（2012.10.8）Parents' Experiences with Their Child Suffering from Cancer　the 44th Congress of the International Society for Paediatric Oncology　London U.K.

⑩ 渕田明子,河上智香,出野慶子（2012.7.22）子どもを看取った看護師の思いの変化とその影響要因　日本小児看護学会第 22 回学術集会　いわて県民情報交流センター（岩手県盛岡市）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
河上　智香（KAWAKAMI, Chika）
東邦大学・看護学部・准教授
研究者番号：30324784

(2)研究分担者
出野 慶子（IDENO, Keiko）
東邦大学・看護学部・教授
研究者番号： 70248863

小川 純子　（OGAWA, Junko）
淑徳大学・看護栄養学部・准教授
研究者番号：30344972

(3)連携研究者　なし

(4) 研究協力者
松浦（儀間） 麻子（ GIMA, Asako）
目白大学・看護学部・助教

森田典子（MORITA, Noriko）
東邦大学医療センター・看護師

原田香奈（HARADA, Kana）
東邦大学医療センター・看護師

辻ゆきえ(TSUJI, Yukie)
大阪府立母子保健総合医療センター・看護師